

人事選抜に関する研究

—推薦入試と試験入試の比較について—

古 澤 暁

はじめに

今日の学校教育の歪みは、入学試験制度に帰因していると考えるのが一般である。特に国立大学における入試のあり方については、根本的に改善する必要があるといわれながら、依然改善されないまま毎年実施されている。入学試験の改善の困難さは、入学試験が入学者の能力適性を検査することよりも、入学定員を確保するための競争選抜試験として実施されているためであると考ええる。

而も国公立大学への進学をめざす受験者が多数存在するため、進学競争はエスカレートして、学校教育が歪められているのである。

他方、私立大学において、無試験入学の制度を一部実施している。(国立大学では長崎大学水産学部だけが、高等学校からの推薦で、ただし入学定員の1割を選抜することになっている)高等学校の学業成績のみで、入学者を選抜する方法は、高等学校教育の進学競争による歪みを是正するものと考えられるが、現在無試験推薦入学の制度を実施しているのは、私立大学及私立短期大学だけである。殊更歴史の浅い大学では推薦入学の制度が最大に利用されている。しかし、この一部推薦入学による制度においても問題がある。それは、推薦入学者の能力が、試験入学者の能力よりも、一般的に劣っているときさやかれていることである。

それで、推薦入試と試験入試の差異について、入学後の学業成績を通し

て、追跡調査を試みようと思うのである。

研究の目的

この研究では、B短期大学に入学した学生の入学後の学業成績について、推薦入学者群と試験入学者群との間に有意な差異が認められるのかを比較検討することにある。

研究の方法

I. 調査対象：昭和45年4月の入学者

国文学科 105名

英文学科 149名

II. 分析資料：第1学年の前期末の学業成績

III. 集団区分：B短期大学では入学者の選抜の方法に、2つの方法をとっているので、それに従って、次の2群に区分した。

第1群 推薦入学者群：一般公募による高等学校からの推薦者に適性検査を実施して、入学者を選抜した群（1月に選考される）

第2群 試験入学者群：一般公募による志願者に学力試験を実施して、入学者を選抜した群（3月に選考される）

結 果

I. 各群間の平均値の有差の検定

$$t = \frac{\bar{X}_1 - \bar{X}_2}{\sqrt{\frac{n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2}{n_1 + n_2 - 2} \left(\frac{1}{n_1} + \frac{1}{n_2} \right)}}$$

上記の公式を用いて t 検定を行った。

1. 第1表国文学科の第2群（平均1124点）の方が、第1群（平均1048点）より優秀であるといえるか。

$$t = 3.39$$

で1%の水準で有意である。

2. 第1表英文学科の第2群(平均732点)の方が、第1群(平均673点)より優秀であるといえるか。

$$t = 0.80$$

で1%の水準で有意である。

国文学科、英文学科共に、試験入学者の方が、推薦入学者よりも、平均値において、優秀であることが認められる。

第1表 平均・標準偏差の表

学科	群	選 抜 方 法	平均点	標準偏差	頻数
国文学科	第1群	推 薦 入 学 者	1,048.87	105.78	76
	第2群	試 験 入 学 者	1,124.10	85.78	29
計					105
英文学科	第1群	推 薦 入 学 者	673.01	88.89	71
	第2群	試 験 入 学 者	732.83	69.68	78
計					149

第2表 評価「不可」の分布表

学科	群	頻 数	科 目 数					
			1	2	3	4	5	6
国文学科	第1群	$\frac{55}{76}$	25	13	8	5	2	2
	第2群	$\frac{13}{29}$	8	4	1			
英文学科	第1群	$\frac{36}{71}$	18	2	5	7	2	2
	第2群	$\frac{22}{78}$	15	4	1	2		

第3表 順位分布表

国文学科		
順位	1 群	2 群
1～10	4	6
11～20	6	4
21～30	5	5
31～40	8	2
41～50	5	5
51～60	8	3
61～70	9	0
71～80	10	0
81～90	8	2
91～100	8	2
101～110	5	0
計	76	29

英文学科		
順位	1 群	2 群
1～10	2	8
11～20	2	8
21～30	2	8
31～40	4	6
41～50	5	6
51～60	2	7
61～70	4	6
71～80	7	4
81～90	4	5
91～100	6	5
101～110	6	3
111～120	7	3
121～130	7	4
131～140	7	3
141～150	6	2
計	71	78

Ⅱ. 評価が不可になっている科目数を調べると第2表のようになるが、ここでも、第1群の者が目立って多く不可の成績をもっているのが、第1群は第2群より能力が劣っている者が多いといえるだろう。

Ⅲ. 成績の順位から推薦入学者と試験入学者を比較してみると第3表のようになる。

1. 国文学科の上位30位までに含まれる者は、第1群の $\frac{15}{76} = 19.7\%$ 、第2群の $\frac{15}{29} = 51.7\%$ である。

第2群の入学者の半数が上位30位以上に含まれているのに対して、第1群の入学者は、19.7%の者が上位30位以上に含まれているにすぎない。

2. 英文学科の上位30位までに含まれる者は、第1群の $\frac{6}{71} = 5.6\%$ 、第2群の $\frac{24}{78} = 30.8\%$ である。

第2群の入学者は30.8%の者が上位30位以上に含まれているのに対して、第1群の入学者は5.6%の者が上位30位以上に含まれているにすぎない。

結 論

結果のⅠ、Ⅱ、Ⅲで認められるように、推薦入学者は、試験入学者よりも劣っているときさやかれていることは、一般的にいって、認めなければならない。試験入試で入学してくる者の中には成績の比較的よい者が多数含まれているということである。

む す び

選抜方法の違いによって、入学者の能力に差があるということは、私立大学における、推薦入学者と試験入学者の入学定員の上での配分を決める一つの要因となるであろう。つまり、試験入試に多数の応募者が集まれば、推薦入試の選考基準を厳しく設定することも一案であるだろう。しかし、実際には推薦入試が試験入試よりも以前に実施されるので、私学の経営面からは、入学者を早い時期に確実に把握することが要求されることだろう。また、そのための努力がなされるだろう。

高等学校の進学率が75%~95%までになってきていることは、高等学校教育が準義務教育化されているともいってよいであろう。このため、高等学校の卒業生の学習能力には、大きな格差の幅が存在している。このことの上に立脚して、大学の進学率が、近年上昇してきていることを考えれ

ば、もはや大学教育はエリート教育ではなく、一般教養を高める、高等普通教育であることを認識しなければならないだろう。そして、入学者選抜においては推薦入学制度（一部の受験者からはよろこばれている）と試験入学制度に十分な配慮がなされなければならないだろうと考えるものである。

参 考 文 献

岩原信九郎 昭35 教育と心理のための推計学 日本文化科学社